



時間と挑戦

令和6年6月27日

黒田 毅

相対性理論における時間の停止という現実は、 $E=mc^2$, $m=E/c^2$ という定式において、 c^2 という変化の連続性が、時間を形成するという仮説とともに、時間への説明を可能とすることができるのである。

これらは、時間は共有の変化であるという考えであり、それは c^2 という変化であるという仮説を得るのである。

これらは、相対性理論における時間の停止という状態は、変化の停止であると考えることができるのである。

これは絶対時間は、その変化の共有性であり、相対時間は変化の有無における時間の形成であると定義できるのである。

これらはまた、 $m=E/c^2$ という定説が真実であるならば、全ての物質は、エネルギーとその活動における形態であるということになるのである。

またビックバンが、ゼロというバランスの崩壊であり、それが定数のエネルギーの拡大とともに、空間の形成を行うということを仮説できるならば、これらエネルギーの凝固性や変化が、全ての物理現実の形成を行ったと考えることができるのである。

これら全てのエネルギー変化は数値化し、その変化とともに数学での説明を可能とすると考えられるのである。

またこれらビックバンにおいて放出されたエネルギーは一定数を得るため、ゼロという根本性と定数のエネルギー量における考察は、ビックバン以前の世界の解明（ゼロという存在への考察）を提案できると考える。

またこれら定数のエネルギーは普遍であり、これらの共有する法は、エネルギー保存の法則であると仮説するものである。

これらが、宇宙のすべての変化の永続性を形成すると考えるものである。



ゼロの崩壊というビックバンは、そのバランスの崩壊であるならば、その歪みという現実が宇宙を創造したことになる。そしてその歪みが、すべての物理運動を形成する基盤であると考えられるのである。

もしこの歪みが中心であるならば、すべてのバランスの形成が、それらを中心にして永続する運動を有し、現実の形成を与えると考えることができるのである。

この歪みが、エネルギー保存の法則という法においてすべてのバランスの形成を行い、すべての宇宙の物理的現実の形成と変化を与えると考えることは可能なのである。

空間の占有する物理存在が、素粒子の大きさであるならば、その運動における占有される空間と相違するものである。これら半永久運動における存在は、 $E=mc^2$ と $m=E/c^2$ というエネルギーと物質の説明を可能とするものである。

地球や惑星の公転と自転が、重力と遠心力と引力を形成することは、陽子と電子の公転と自転が、引力と重力と遠心力が存在することを定義できるのである。これら力の形成は、必ず物理現実への影響を有するのである。

ビックバンと空間の形成は、その定数のエネルギー量が、空間の張力におけるバランスを形成するまで、その拡大を得ると考えることができる。またその凝縮性は、その初期において、存在するものであり、それらがすべての物理存在性誕生を与えたことは現状の物理学の定説と同じである。